

所沢市立美原小学校 いじめ防止基本方針



所沢市立美原小学校

所沢市立美原小学校いじめ防止基本方針

いじめの防止等に関する基本的な考え方	1
いじめの定義について	1
いじめの理解について	1
1 いじめの防止	2
2 いじめの早期発見	3
3 いじめへの対処	4
4 地域や家庭との連携	5
5 関係機関との連携	6
6 重大事態への対処	6
7 いじめに対する具体的な措置	7

美原小学校いじめ防止基本方針

いじめの防止等に関する基本的な考え方

いじめ問題の解決にあたっては、未然防止、早期発見及び早期対応が重要です。

その実現のためには、学校、保護者及び所沢市がいじめ対応の基本姿勢を共有し、緊密な連携のもと、組織的な対応ができるよう改めて体制の整備を図らなければなりません。

また、全国で発生したいじめ重大事件を教訓に、いじめ撲滅に向けた新たな考え方でいじめ問題の対策を講じる必要もあります。

そこで、美原小学校では、以下の姿勢・考え方のもと、すべての児童が安心して楽しく学べる学校づくりをより一層推し進めていきます。

いじめの定義について

○いじめの定義については、いじめ防止対策推進法の規定によるものとします。

第2条 この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人間関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

2 この法律において「学校」とは、学校教育法（昭和22年法律第26号）第1条に規定する小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校（幼稚部を除く）をいう。

3 この法律において「児童等」とは、学校に在籍する児童又は生徒をいう。

4 この法律において「保護者」とは、親権を行う（親権を行う者のないときは、未成年後見人）をいう。

【いじめ防止対策推進法 第2条】

いじめの理解について

○いじめの理解については、共通の認識をもって対処するものとします。

いじめは、どの子供にも、どの学校でも、起こりうるものです。とりわけ、嫌がらせやいじわる等の「暴力を伴わないいじめ」は、多くの児童が入れ替わりながら被害も加害も経験します。

また、「暴力を伴わないいじめ」であっても、何度も繰り返されたり多くの者から集中的に行われたりすることで、「暴力を伴ういじめ」とともに、生命又は身体に重大な危険を生じさせます。

いじめの加害・被害という二者関係だけでなく、学級や部活動等の所属集団の構造上の問題（例えば無秩序性や閉鎖性）、「観衆」としてはやし立てたり面白がったりする存在や、周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」の存在にも注意を払い、集団全体にいじめを許容しない雰囲気形成させるようにすることが必要です。

上記を踏まえ、「けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断する」ことが大切です。

1 いじめの防止 ～いじめを生まない土壌づくり～

【学校の取組】

いじめの未然防止・早期発見に向け、校種間の連携や心のふれあい相談員やスクールカウンセラー、教育相談コーディネーターを活用した相談体制の充実、保護者や地域への啓発など、従来から行っている取組内容を見直し、いじめ重大事件を教訓として児童の特性を踏まえた実効性のある取組をします。

児童からの相談に対応できる体制整備を図り、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等を活用するなど、関係機関との連携等を図り、必要な支援を行います。

「人権週間」等を活用し、いじめに対する標語づくりや行動宣言等を行い、クラスや学校単位で「いじめを考える授業」や「いじめが起きにくいクラスづくり」への取組などを活用し、一人一人がいじめに対して自分にできることを考える機会とします。

(1) 集団づくり・人間関係づくりに向けた支援

児童の望ましい人間関係を育むために、SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）をはじめとした適応指導を行うとともに、教育相談に関する教職員研修を継続して実施します。

(2) 「子供の人権」の啓発推進

お互いの人権を尊重する意識の高揚を図る取組や研修会の中で、「子供の人権」について啓発します。

① いじめは重大な人権侵害

いじめは重大な人権侵害に当たり、被害者、加害者及び周囲の児童に大きな傷を残すものであり、決して許されないことを理解させます。

② 東日本大震災により被災した児童に対して

東日本大震災より被災した児童又は原子力発電所事故により避難している児童については、被害児童が受けた心身への多大な影響や、慣れない環境への不安感を教職員が十分に理解し、当該児童に対する心のケアを適切に行い、細心の注意を払いながら、被災児童に対してのいじめについて理解させます。

③ 配慮が必要な児童について

特に配慮が必要な児童については、日常的に、当該児童の特性を踏まえた適切な支援を行うとともに、保護者との連携、周囲の児童に対する必要な指導を組織的にを行います。

(3) 道徳教育の充実

いじめ未然防止のため道徳教育の充実を図り、児童の豊かな心をはぐくみ、「いじめをしない、させない」資質を育てます。

(4) 体験教育の充実

子供たちが他者や社会、自然との直接的なかかわりの中で自己と向き合うことで、生命に対する畏敬の念、感動する心、共に生きる心に自らが気づき、発見し、体得する機会とします。

福祉体験やボランティア体験、勤労体験等、発達の段階に応じた体験活動を教育活動の中に取り入れることで、子供たちの心を育てます。

(5) 情報モラル講習会の充実

健やか輝き支援室生徒指導・いじめ問題対策員や関係機関等と連携し、児童、保護者向けに実施している講習会の充実を図り、スマートフォン（メール、ライン等）やインターネットを適正に使用する能力・態度を育成します。

2 いじめの早期発見 ～小さな変化に対する敏感な気づき～

【学校の取組】

(1) 定期的ないじめの実態把握と校内における対応

年間を通して（学期に1回程度）定期的にいじめに関する調査を実施したり、個人面談や日記等を活用し、いじめは起こり得るとの認識のもと、いじめの疑いの事例も含めてその状況を的確に把握します。対応の必要なケースについては事実確認とともに、まずいじめられた側の児童の保護者との連携を十分に図ります。

けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行うなど、児童の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを見極めていきます。

また、解決したと安易に判断せず、保護者との連携を図り長期的な（最低3か月以上）見守りを組織として続けるよう、校内の組織を工夫します。

(2) 教職員の指導力の向上

教職員がいじめの兆しを発見する目を養うとともに、適切に対応する力の向上を図ります。

そのために、埼玉県教育委員会「彩の国 生徒指導ハンドブック New I's」や所沢市「いじめ対応マニュアル」を活用して校内でのいじめに関する研修を実施し、全教職員の共通理解を図るとともに、個々の児童への指導の充実を図ります。

教職員がいじめを発見、または、相談を受けた場合、些細な兆候が見られたりなどの懸念がある場合は、児童からの訴えを抱え込まずに、または対応不要であると個人で判断せず、直ちに全てを報告、相談をします。学校の特定の教職員がいじめに係る情報を抱え込み、「学校いじめ問題対策組織」に報告を行わないことは、法第23条1項の規定に違反しうることを理解します。

(いじめに対する措置)

第二十三条

学校の教職員、地方公共団体のその他の児童等からの相談に応じる者及び児童等の保護者は、児童等からいじめに係る相談を受けた場合において、いじめの事実があると思われるときは、いじめを受けたと思われる児童等が在籍する学校への通報その他の適切な措置をとるものとする。

(例) 好意から行った行為が意図せずに相手を傷つけたが、すぐに加害者が謝罪し教員の指導によらずして良好な関係を再び築くことができた場合等においては、学校は「いじめ」という言葉を使わずに指導するなど、柔軟な対応による対処も可能だが、これらの場合であっても、法が定義するいじめに該当する場合があるため、事案を法第22条の学校いじめ対策組織へ情報共有します。

3 いじめへの対処 ～問題を軽視せず、迅速かつ組織的に対応～

【学校の取組】

(1) いじめ問題に対応する体制の整備

学校だけでは解決が困難ないじめに関する問題に対応するために、組織的な指導体制を整えます。

「学校いじめ防止基本方針」を定める際には、国の基本方針、埼玉県基本方針、所沢市基本方針を参考にし、「いじめの防止のための取組」「早期発見」「いじめ事案への対処のあり方」「教育相談体制」「生徒指導体制」「校内研修」等を定めます。

また、いじめの被害児童に対する支援・加害児童に対する指導の体制・対応方針の決定と保護者との連携といった対応を組織的に実施する体制を支援していきます。

(2) 教育相談の充実

① 児童が相談しやすい校内体制の工夫

相談週間を設定したり、児童が相談する時間帯や場所などを工夫したり、児童が自身の思いを表現できる環境づくりに努めます。

② 多面的な相談体制の構築

校内に組織されている、生徒指導部会、教育相談部会だけでなく、校内で組織する委員会（ケース会議）に、校外の関係者の参加を依頼するなど、いじめを解決するための包括的な体制を整えます。

(3) いじめる側の児童への実効性のある指導

① 毅然とした指導の徹底

いじめる側の児童に対する指導については、全職員が毅然とした態度で一丸となって臨み、状況が改善しない場合は、別室指導等にて個別の働きかけを行います。また、暴行や恐喝等の事例に関しては、警察と連携して対応します。

② 保護者と一体となったいじめ改善

いじめる側の児童に対する指導については、その保護者にも状況を伝え、市や学校の基本姿勢を繰り返し指導することを通して、保護者とともに改善を図るように努めます。

「学校いじめ防止基本方針」については、ホームページへの掲載等により、保護者や地域住民が内容を容易に確認できるようにするとともに入学時や各学年年度初めに、児童、保護者、関係機関等に周知します。

③ 加害児童に対する成長支援

いじめの加害児童に対する成長支援の観点から、加害児童が抱える問題を解決するための具体的な対応方針を定めるよう周知します。

(4) 児童の主体的な活動の促し

小学校の児童会において、児童が自発的・自主的にいじめを考え、自ら改善に向けた活動を進められるように指導します。また、児童自らが望ましい人間関係を構築するための具体的な手立てを学級活動等で指導します。

(5) いじめの解消について

いじめの解消は、単に謝罪をもって安易に解消とせず、いじめが「解消している」状態とは、少なくとも次の二つの要件が満たされている必要があります。ただし、これらの要件が満たされている場合であっても、必要に応じ、他の事情も勘案して判断するものとします。

① いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われているものを含む）が止んでいる状態が相当な期間継続していること。相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とします。ただし、いじめの被害の重要性から更に長期の期間が必要であると判断される場合は、この目安にかかわらず、学校の設置者又は学校いじめ問題対策組織の判断により、より長期の期間を設定するものとします。学校の教職員は、相当な期間が経過するまでは、被害・加害児童の様子を含め状況を注視し、期間が経過した段階で判断を行います。その時点で、行為が止んでいない場合は、改めて、相当な期間を設定して、状況を注視していきます。

② 被害児童が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうか判断する時点において、被害児童がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。被害児童本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認します。学校は、いじめが解消に至っていない段階では、被害児童を徹底的に守り通し、その安全・安心を確保する責任を有します。学校いじめ問題対策組織においては、いじめが解消に至るまで、被害児童の支援を継続するために、支援内容、情報共有、教職員の役割分担を含む対応プランを策定し、実行します。

※いじめが「解消している」状況とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、学校の教職員は、当該いじめの被害児童及び加害児童については、日常的に注意深く観察します。

※卒業をもって直ちに「解消しているもの」と判断することがないようにする。（小学校から中学校へ確実に引き継ぐ。）

4 地域や家庭との連携 ～学校と保護者・地域の一体化～

【学校の取組】

(1) 保護者・地域との連携強化及び啓発の促進

児童の学校生活の様子やいじめの実態、対応方針等について、保護者会、学校だより及びホームページ等を通じて積極的に情報発信し、学校と保護者・地域が一体となったいじめ対応の体制を構築します。

また、学校応援団（安全安心ボランティア等）と連携した児童の見守りを検討します。

(2) 校種間及び関係機関との一層の連携

幼・保・小連携 小・小連携 小・中連携による的確な情報伝達

適切な時期に異校種間でいじめにかかわる情報連携を行います。特に中学校への引き継ぎについて確実に行います。また、必要に応じて諸機関（児童相談所、所沢警察署、こども相談センター、民生委員・児童委員、主任児童委員、所沢市教育センター等）との連携を進めていきます。

5 関係機関との連携 ～報告・連絡・相談体制の確立～

【学校の取組】

(1) 子供関連機関との情報共有

いじめの要因は様々であることから、学童保育所、所沢市立教育センター、健やか輝き支援室、こども支援センター、福祉関連機関、児童相談所及び警察等との情報共有を継続的に行います。

安全・安心な学校と地域づくり推進本部会議定める「いじめ問題対策連絡協議会」の機能を活かしていじめ防止に努めます。

(2) 幼児期からのいじめ未然防止に向けた取組の推進

「子育ての目安『3つのめばえ』を活用し、発達の段階に応じて幼児が他の幼児と関わる中で相手を尊重する気持ちをもって行動できるよう、幼児期からのいじめの未然防止に向けた取組を促します。

6 重大事態への対応 ～早期かつ即時対応・組織的対応～

【学校としての取組】

(1) 重大事態の報告

重大事態と思われる案件が発生した場合は、直ちに所沢市教育委員会に報告します。

(2) 調査の実施

校内いじめ問題調査組織を設置し、調査を実施し、客観的事実を明確にします。被害児童が欠席していないことから、不登校重大事態の定義には該当しないため詳細な調査を行わないなどといった対応がとられないことがないよう留意します。

(3) 調査結果の提供及び報告

① いじめを受けた児童及びその保護者への適切な情報提供

調査によって明らかになった事実関係について、いじめを受けた児童やその保護者に対して説明を行います。これらの情報提供に当たっては、他の児童のプライバシーに配慮するなど、関係者の個人情報に十分配慮し、適切に提供します。

② 調査結果の報告

調査結果について、所沢市教育委員会に報告します。

(4) その他の留意事項

重大事態が発生した場合に、関係のあった児童が深く傷付き、学校全体の児童や保護者、地域にも不安や動揺が広がることもあり、時には事実に基づかない風評等が流れる場合もあります。学校は、児童や保護者への心のケアと落ち着いた学校生活を取り戻すための支援に努めるとともに、予断のない一貫した情報発信、個人へのプライバシーへの配慮に留意します。

7 いじめに対する具体的な措置

【独自の判断は禁物！！ 素早く対応！！】

※「様子を見よう。」「わるふざけだろ。」「単なるけんかだろ。」→考えは捨てる。

- 「いじめは絶対に許されないもの」との認識に立つ。
- 「早期かつ即時対応」と「組織的対応」の認識に立つ。
- 「いじめられている子どもの側に立つ」ことを大前提にして判断する。
- 「小さな芽を小さいうちに摘む」ことを重視する。

1 素早い事実確認

① 速やかな報告の徹底

- 担任：現状目撃者等の情報受信者→担任・学年主任→教頭・教務→校長のルートで情報や状況を直ちに報告する。
- 情報受信者を中心に直ちに「いじめ発見報告書」を作成し、教頭へ提出する。
- 教頭により、第1次緊急対応会議を招集し、報告書の内容を周知する。

② 第1次緊急対応会議

【第1次緊急対応会議】当該児童に聞き取りをする前に事実確認を進めるための会議

(1) 構成員

- ・校長 ・教頭 ・教務 ・生徒指導主任 ・担任 ・学年主任と学年教員
- ・養護教諭 ・特別支援教育コーディネーター ・教育相談主任

(2) 資料

- ・いじめ発見報告書 ・被害、加害児童の家庭環境調査票

(3) 会議内容

- ① 事実確認のための必要事項 → 「いじめ対応に係わる確認聞き取り票」を活用
 - ・いじめの状況（日時 場所 人数 様態 等）
 - ・いじめの動機や背景 ・時系列での事実の把握
 - ・被害児童と加害児童の家庭環境や日頃の言動や性格、その特徴
 - ・本件について家庭が知っていること
 - ・教職員や周辺児童が知っていること
 - ・これまでの問題行動等
- ② 事実確認の計画
 - ・事実確認のための役割分担
 - ・被害児童への聞き取り ・加害児童への聞き取り
 - ・周辺児童への聞き取り ・該当児童保護者への連絡

③ 事実確認の実施 → 【第1次緊急対応会議における聞き取り票】

- (1) 被害児童への聞き取り
- 教職員は、被害者の立場に立ち、「味方」となって支える立場で接する。
 - いじめられていることを語りたがらない場合は、時間を重ねていくことを考慮し、性急にならずに気持ちに寄り添って話を聞く。
- (2) 加害児童への聞き取り
- いじめを行っている時の気持ちなどについて話をさせる。
 - いじめと感じていなかったり、認めようとしなかったりする場合は、威圧的にならず、受容的に聞く。
 - 「いじめは絶対に許されない行為」として、けんか両成敗的な指導はしない。
- (3) 周辺児童への聞き取り
- 事実を確認するこの段階では、周辺児童の行動に対する善悪の判断はしない。
 - 内容に矛盾がないかどうか慎重かつ多面的に検討し、事実を明らかにする。
 - 事実確認終了後、時と場を考慮して必要な指導を行う。
- (4) 被害者保護者、加害者保護者に対して
- 保護者とは直に会って面談を行う。
 - 保護者の立場や心情に十分に考慮し、現状と今後の具体的な対応説明をする。
 - 保護者の心配していることを明らかにして、終息に向けた今後の見通しについて説明していく。
- ※ 校長 → 教頭・教務 → 全職員 のルートで確認事実を周知する。

2 組織的対応について

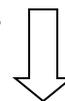
① 第2次緊急対応会議

【第2次緊急対応会議】 具体的な指導方針や指導体制、対応策の決定と実践

(1) 指導方針及び指導体制の決定

- 第1次緊急対応会議のメンバーで具体的な指導方針と対応策を決定
 - ・被害児童、加害児童、周辺児童、両保護者への指導方針と具体的対策を決定し、担当を明らかにする。
- 実際の対応 → 【対応記録票に記録】
 - ①被害者児童への対応班
→ 学年主任 担任 養護教諭 教育相談主任
 - ②加害者児童への対応班
→ 学年 担任 生徒指導主任 (教育相談主任)
 - ③周辺児童への対応班
→ 学年 教務主任 学年部教員
 - ④該当児童保護者への対応班
→ 教頭 学年主任 (担任)

全教職員で分担する。



いじめ解消を確認するまで対応を継続する。

い じ め 発 見 報 告 書

No	確認事項	具 体 的 事 実
1	発生日時 (確認日時)	平成 年 月 日 ()
2	発生場所 (確認場所)	
3	被害児童	年 組 児童氏名 (男・女)
		【とらえられた被害児童の思いや発言】
4	加害児童	年 組 児童氏名 (男・女)
		集団の場合 (氏名を連記)
		【とらえられた加害児童の思いや発言】
5	内容・状況 (聞き取り等)	【きっかけ・具体的状況・継続の有無とその長さ 等を含む。】
6	情報受信者	

【第1次緊急対応会議に係わる事実確認票】

いじめ対応に係わる事実確認票

※この聞き取りは、第1次緊急対応会議の事実確認のために作成するものである。

NO	確認項目	具 体 的 な 内 容
1	いじめの発生日時 (確認日時)	平成 年 月 日 ()
2	いじめ発生の場所 (確認場所)	
3	被害児童	年 組 児童氏名 男・女
4	加害児童 (または集団)	年 組 児童氏名 男・女
5	いじめの動機やきっかけ	
6	具体的な状況	
7	被害児童及び加害児童の家庭環境	(被害者児童) (加害者児童)
8	被害児童及び加害児童の日頃の言動や性格	(被害者児童) (加害者児童)
9	周辺児童からの情報	
10	これまでの問題行動	
11	その他	

【第1次緊急対応会議における聞き取り票】

() 班 聞き取り記録 NO ()

対応者

具体的な聞き取り記録 月 日 () : ~ :

時間	具体的な聞き取り内容の記録

【第2次緊急対応会議における対応記録資料】

() 班 対応記録

NO ()

対応者

基本的な対応方針

本事案に基づく具体的な対応方針

具体的な対応記録 月 日 () : ~ :

時 間

具体的な聞き取りや指導内容の記録

() 班 対応記録 NO ()

具体的な対応記録 月 日 () : ~ :	
時 間	具体的な聞き取りや指導内容の記録